《修士論文要旨》

ストレスコーピング方法とパーソナリティの関係

－原子価の影響に関する実証的研究－

硲　　美　陽*

【目　　的】

ストレス研究について様々な研究が行われてきた。心理学分野についてもLazarusを始めとして様々な研究が行われている。本研究はその研究の中でもストレスコーピング方法とパーソナリティの関係に着目し、対人関係のありかたという観点より原子価構造がストレスコーピング方法の選択に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

【方　　法】

回答者の基本属性：性別、学籍番号を記述してもらい無記名で行った。

質問項目に関してはストレスコーピングを測定するための「日常ストレス評価尺度」（辻由美子ら, 1999）の33項目、原子価を測るためのVAT（Valency Assesment Test（Hafsi, 1997）の25項目、以上の質問紙を作成した。

奈良大学に通う大学生男女を対象とし、複数の講義内で実施した。回答者数は187名であった。その中で記入漏れがあったものなど不備を除き有効回答数は114名（男64名（56.1％）女50名（43.9％））

F（闘争）66名（57.9％）　D（依存）19名（16.7％）　P（つがい）20名（17.5％）　Fl（逃避）９名（7.9％）であった。

【分析・結果】

辻由美子ら（1999）の「日常ストレス評価尺度」の信頼性について分析を行ったところ α =.823であった。

主因子分析（バリマックス回転）で分析したところ５つの因子を得た。

第Ⅰ因子「問題への取り組みによるコーピング選択」　第Ⅱ因子「自己抑制によるコーピング選択」　第Ⅲ因子「合理化によるコーピング選択」　第Ⅳ因子「衝動的行動によるコーピング選択」　第Ⅴ因子「コーピング方法選択の欠如」

日常ストレス評価尺度で得た５因子と活動原子価を一元配置分散分析で分析したところ４つの

平成23年度　*社会学研究科社会学専攻（臨床心理学コース）

因子について有意差が見られた。また第Ⅰ因子「問題への取り組みによるコーピング選択」はF（闘争）、第Ⅱ因子「自己抑制によるコーピング選択」はFl（逃避）、第Ⅲ因子「合理化によるコーピング選択」はFl（逃避）、第Ⅴ因子「コーピング方法選択の欠如」はD（依存）が最も高い値を示した。第Ⅳ因子「衝動的行動によるコーピング選択」についてはどの活動原子価とも有意差が見られなかった。またP（つがい）についてはストレスコーピング方法のどの因子にも有意差がみられなかった。

【考　　察】

結果よりいくつかの活動原子価がストレスコーピング選択方法と関連することが明らかとなった。

まずF（闘争）原子価は第Ⅰ因子「問題への取組によるコーピング選択」で最も高い値を示した。これはF（闘争）原子価を持つ者の特性である対象に立ち向かって対象と繋がりを持つという繋がり方と問題に積極的に取り組む為のストレスコーピング方法であるという部分が一致している。

またD（依存）原子価はⅤ因子「コーピング方法選択の欠如」において最も高い値を示したことについても同様に、D（依存）原子価を持つ者の特性である頼り頼られる繋がりを望む依存した関係と自分ではコーピング方法を選択できず誰かの助けを待っているという方法の選択が類似している。

最後にFl（逃避）の原子価は二つの因子において高い値を示したが、第Ⅱ因子「自己抑制によるコーピング選択」と第Ⅲ因子「合理化によるコーピング選択」はどちらも対象から離れ冷静に対処している点がFl（逃避）原子価の持つ対象と距離を置き関係を持とうとする特性と類似している。

以上のことより原子価構造がストレスコーピング選択の方法に原子価構造それぞれの特性が影響を及ぼしていることが推測される。また対人関係の在り方から見て、原子価構造それぞれの対象との繋がり方がそれぞれの特性に類似したストレスコーピング方法を選択させていることが明らかとなった。

また第Ⅳ因子「衝動的行動によるコーピング選択」についてはどの活動原子価とも高い値が見られなかったことについては、このコーピング方法を選択する者はコーピング方法と類似した破壊的な繋がりを持っていてどの原子価の繋がり方にもそぐわないのではないか。よって有意差が見られなかったのではないかと考えられる。

今回の調査では大学生という限られた対象に対しての調査となった、そのため偏ったストレスコーピング方法が選択されている可能性がある。今後は年齢層の幅を広めてより多くの回答を得ることが望ましい。また原子価についても個数にばらつきがあり、十分な個数を得ることが出来なかった。今後は原子価の個数についても検討しばらつきが無いように考慮したい。